父の英断に感謝

和辻　敏子

平成 14 年 3 月末に、甲子園短期大学を退職し下記のような挨拶状を出した。

> 春うららかな今日この頃、皆様にはお健やかにお過ごしのこととお喜び申し上げます。
> さて　私
> 3 月末日をもちまして、甲子園短期大学を退職いたしました。
> 22 年間の長い年月公私共に温かいご指導とご支援を賜り、大過無く勤めさせて頂きました。
> これも一重に皆様のお陰の賜と心から厚くお礼申し上げます。
> 甲子園短期大学の日々は私の生涯の中でも、終生忘れる事の出来ない貴重な体験と研鑽の場でございました。
> ここに皆様のご厚情を感謝致しますと共に、今後よろしくご指導下さいますようお願い申し上げます。
> 末筆ながら皆様のご多幸とご健康をお祈り致しまして、御礼のご挨拶を申し上げます。
> 平成 14 年　4 月

私の退職に際し、どのようなルートで伝わったのか、大阪市立大学（以後市大とする）の後輩から非常勤講師や専任教授の依頼がきました。退職後は、甲子園短期大学の非常勤講師だけにして、食事などで不便をかけていた夫へのサービスをしようと思っていましたので決断しかねました。しかし夫が「言ってもらえる間が華やで」、「時間的に行けるなら行ったらええがな」と言ってくれました。在職中は帰宅時間が遅い為、夕食は前夜に作ったものを「チン」してもらっていた為、退職後は出来るだけ「チン」を避けたいと思っていましが、後輩達の厚意に感謝し、専任教授職は断って他短大へも行くことしました。

このような市大の後輩に恵まれたのは、大学選定における父の英断によるものでした。私が天王寺高校3年一学期の時に進学相談会があり、母は担任の津田先生と懇談をして下さいました。先生は、奈良女子大学又は大阪府立女子大学を勧められました。母は女高師タイプを嫌い、大阪府立女子大学を私に勧めました。しかし、父はこれからの時代は男女共学の大学が主流となり、将来性があるのに対して、女子大は将来的に不安感があるので強く反対されました。

父の女子大悲観論の背景には、戦前名門の清水谷女学校が戦後の教育改革による男女共学によって、著しく知名度が低下したためと思われます。その当時大阪の船場近辺では良家の子女は、清水谷女学校へ行かすのを最も望まれていました。父は、娘二人が清水谷女学校に入った事に非常に満足をしていました。ところが男女共学後は、前身女学校である高校において大手前女学校を除く他の女学校は、殆ど戦前の名門の面影を消失してしまいました。その現状をきちんと把握して父は、私の大学選定には女子大を反対されたのでしょう。私の大学進学に関しては、まずは両親を説得して下さった姉達のご尽力のお陰であると、今でも深く心から感謝しています。

私は担任に父の勧めで市大の家政学部を受験しますと報告しました。先生は家政学部で大学

院があるのは市大だけで、お茶の水女子大にも無いから、お父さんの言われるように確かに有望視されるし、市大の家政学部なら楽勝やと事も無げに言われました。

その頃の市大の家政学部は奈良女子大に比較して知名度が低く、他学部でも天王寺高校から 70 名ぐらいの合格者が出ていました。だから不合格なら高校の恥とも言われプレシャーがかかりました。市大の母体である大阪商大の杉本キャンパスは、米軍の基地に接取され各学部バラバラのタコ足大学と呼ばれていました。家政学部は白髪橋にあり、川村の姉の家近くにありました。

入学試験日は昭和 28 年 3 月 3 日～4 日に行われ、雪のちらつく寒い日でありました。姉は温かいお弁当を持って来てくれたので感激しました。昔も今も変わらず、優しい心配りをしてくれる姉であり、両親自慢の娘として、資質、人柄の良さに敬意を抱いているのは私だけではなく、妹全員心から深い信頼と姉としての大きな存在感を持っていると思います。

市大では多くの尊敬する先生や友人との出会いがあり、私の生き方に多大の影響を及ぼしました。仕事を持てた事、学位を取れた事、短大で 35 年振りの名誉教授を頂けたこと、退職後の非常勤講師など、すべて父の英断による市大に学んだ結果によるものであります。

更に女性で博士を持った科学者が希な存在であった時代に、村田･浦上両教授の指導を受けられたことを非常に誇りに思っています。

特に浦上教授は、自分の定年までに博士を取る事を勧めて下さいましたが、先生の厚意に応じることなく、結局夫と共にインンドネシヤに行くことにしました。

しかし、短大で教育する立場になった時、私が学生時代に憧れを抱いた先生に、少しでも近づくように努力しなければならないと決心し、まず第一として学歴の無い私は学位を取る必要があると考えました。

時すでに遅し浦上先生は退官されていましたが、博士取得について親身になって考えて下さった深い教育愛に、頭が下がり感涙したあの思い出は忘れる事が出来ないものがあります。

父母にこの事を話すると、「大学院に反対して悪かったなー。大学院を出ていたら、今更こんな苦労をすることなかったかもしれない。」と父はうつむきかげんで、声を落としながらボッソリと言われました。その時の光景を今でも忘れることなく、鮮やかに蘇ってきます。どうしてあの時に、父に市大での得がたい経験や尊敬する先生との出会った幸せを話せなかったのか、今更ながら後悔の念で一杯であり残念でたまりません。

さて、私は 5 才の時父と二人で東京へ旅行、10 歳では父の生家に疎開、学生時代はお盆、歳暮時期にはそごうで配送のアルバイトをし、父の社会的な人間像を垣間見る事ができました。他の姉妹が経験しなかった父との触れ合いがありました。私が男なら父は会社をどの様に経営されていかれたのでしょうか。後継ぎの無い空しさや、寂しさを胸中に秘められているのに、それらに対して慰めの言葉もかけず淡々としていたあの頃の私、若いとか未熟だとかという言葉で弁解できない、何か根本的な心情の欠如への痛恨、過ぎし日の禍根を嘆かずにはおられないものが胸に込み上げてきました。

愚痴や文句を言わず、ありがとうと感謝の気持ちを表し、いつも慈愛あふれる笑顔で出迎えてくれた父に心から感謝を捧げます。幸せを感じるような温かい、あのにこやかな笑顔は、一生忘れ

る事なく心の中で生き続けることでしょう。本当にありがとうございました。

生誕百年を迎えるに当たり、生前に言えなかった事、後悔していることをお詫び出来た貴重な機会に感謝しております。

娘達の心の中に生き続けている「福の神のお父さん」 娘達のファミリーの前途に夢と憧れ、素晴らしい感動をお与え下さい。父の自ら示された温和、誠実、勤勉、努力を忘れることなく子孫に伝承していく事が娘としての責務であり、今出来る父への唯一の親孝行だと思っております。

最後になりましたが、父の生誕百年を祝し、心からお祝い申し上げます。